

育児雑誌による情報提供について

第17回「かるがも・ねっと」学習会より

2007年9月27日(木)、「育児雑誌から、今の子育てを考える」をテーマに、第17回学習会を開催しました。今回は、前回から続く「子育てにおける情報」を考える手がかりとして、母親たちにとって欠かせない情報源となっている育児雑誌を取り上げました。当日は15名ほどの方が参加され、現在発行されているさまざまな育児雑誌を実際に手に取りながら、子育て中の父親・母親が持っている母親像、父親像、子育て観について話し合いました。このような会の流れを踏まえ、ここでは、学習会で出された、雑誌読者となる母親像、ならびに支援者が母親たちにできる支援のあり方についての意見をご紹介します。

(1) 育児雑誌の内容について

育児雑誌の歴史

まず、育児雑誌について考える前提として、コロボックルの五十嵐泉さんから、育児雑誌の歴史が紹介されました。

育児雑誌が発行されるようになったのは、戦後間もなくのことです。当時の雑誌には、洋風家庭料理に代表されるような欧米風の子育てのライフスタイルが紹介されていました。育児雑誌は、新しい子育てのあり方を取り入れるための情報媒体として、家庭に入っていったのです。その後も、雑誌の発行部数は順調に伸び、1970年代には戦後当初の6倍まで増加します。内容としては、1980年代頃から、読者の投稿による記事が増加していきました。現在発行されている雑誌にも、読者の悩み相談や子どもの写真といった投稿をもとにした記事を掲載するものが多くあります。このような「読者参加型」という形は、現代の育児雑誌の1つの特徴といえます。



雑誌投稿をする母親たちとその背景

こうした育児雑誌の歴史を踏まえ、その後の学習会では、実際に雑誌を手に取りながら、読者となる母親像について話し合いました。その結果、現代の母親たちにとって、育児雑誌は育児不安を解消し、本音を出せる場としての意味があることがみえてきました。

実際、雑誌の記事をみると、読者投稿欄には毎月のように、子どもを愛せないことに悩む母親の声が寄せられています。また、学習会に参加した支援者からは、子育てをする自信がないため、保育所に子育てをしてもらおうと働き始める母親がいるという話も出されました。育児雑誌は、こうした不安を抱える母親たちが自分の気持ちをありのままに出すことができる場所、また、そうした気持ちを受け止めてくれる場所となっているのです。

それではなぜ、母親たちは、育児雑誌でしか本音を出せないのでしょうか。そこには母

親たちの抱える、「人間関係の煩わしさ」が関係しているようです。

実際、現在子育てをしている支援者からは、母親たちの気持ちとして、「顔をみて相談したいのは山々だが、人間関係の煩わしさから、匿名での投稿をしたくなる」という話が出されました。日常的に顔を合わせる人に相談したいという希望は抱きつつも、「アドバイス通りにできなかつたらどうしよう？」といった不安や、その場合に、「今度声をかけてもらったら、何て答えればいいだろう？」といった心配が先に立ってしまうようです。また、知り合いに相談する場合は、当然のことながら、「こんなことを言ったら相手はどう思うだろう？」といった気遣いが必要になりますが、雑誌を通じた顔が見えない関係であれば、そうした心配や気遣いは不要になります。匿名の関係では、後腐れなく、楽に話ができるのです。こうした「人間関係の煩わしさ」が、育児雑誌への投稿を促しているようです。

さらにいうと、こうした「人間関係の煩わしさ」を避ける傾向は、他の場面でもみられます。例えば、昨今では、送迎バスのバス停への到着時間をメールで知らせてくれる私立幼稚園が人気を博しているようです。到着時間が事前にわかることで、待ち時間がなくなり、他の園児の親と話す必要がなくなることが、その理由とのことです。こういった「人間関係の煩わしさ」を避けようとする姿勢こそが、育児雑誌への投稿に結びついているといえそうです。

(2) 雑誌の抱える限界と、支援の場でできること

このように、育児雑誌は、子育て中の母親たちにとって欠くことのできない存在となっているようですが、こうした育児雑誌も限界を抱えています。それが「個別対応ができない」ことです。

例えば、育児相談にのる場合でも、投稿を通じての相談では、母親や子どもの様子を詳しく聞いたり、直接みたりすることは難しくなります。したがって、相談に対する回答は、個別の情報に応じたアドバイスではなく、最終判断を読者にゆだねる形をとることになります。読者にしてみれば、一時的には気持ちを吐き出したという満足感が残りますが、結局のところ、自らの問題は残されたままという状況になるのです。顔の見えない相談の限界はここにあるといえます。

そして、こうした雑誌の抱える限界を超えることができるのが、実際の支援の場であるといえます。実際に顔を合わせる関係だからこそ、一人ひとりの状況に合わせた対応策を、共に考えることが可能になるのです。現在の子育て支援の場には、育児雑誌からの情報に困まれた母親たちが多く訪れています。顔のみえる関係のなかでの相談は確かに難しいこともありますし、疲れる部分もありますが、雑誌にはない人間関係の温かさがあります。こうした点を踏まえると、今後の支援者の役割としては、育児雑誌を否定するのではなく、その存在も認めつつ、人間関係のなかで子どもが育っていくことを伝えることが必要であることが確認されました。また、人が集う場所を設定することも、支援者の役割として重要ではないかという意見も出されました。



* * * * * お知らせ * * * * *

① 第 18 回学習会を開催します。ぜひご参加下さい。

次回の学習会では、まつぼっくり保育園前園長の山崎ひと子さんをお迎えして、親を支援する保育園の営みから、それぞれの支援の場に生かせるような知恵を学びたいと思います。お忙しいこととは存じますが、みなさまどうぞご参加下さい。

テーマ： 保育園における親育ち、親育てに学ぶ

日時： 2008年1月28日(月) 13:00~15:00

場所： 桜庁舎2階 第1会議室

問い合わせ： TEL：857-9037(つくば市地域子育て支援センターけやき広場)

E-mail：karugamo_net@yahoo.co.jp

② 平成19年度文部科学省家庭教育支援総合推進事業 公開講演会を開催します。

幼児～小学生をもつ保護者の方、子育て支援者を対象に、講演会を企画いたしました。ぜひご参加ください。

日時： 2008年2月17日(日) 14:00~16:00

場所： つくばカピオホール 参加費：無料

※保育あり/無料・定員12人・要予約・ご希望の方はお問い合わせください。

講師：富田富士也氏(子ども家庭教育フォーラム代表)

講演テーマ：親子で盛り上がる レッツゴーカウンセリング

ー苦しい今を笑って話せたら、きっと元気が近づいてくるー

問い合わせ：つくば市教育委員会生涯学習課社会教育係 Tel：836-1111(内線4156)

筑波大学共生教育学(教育社会学)研究室

E-mail：kakyou_kouza@yahoo.co.jp/TEL・FAX：853-4599

かるがもの羽音 - 編集後記 -

「ニュースレター 18」をお届けします。少し遅れた年賀状とともに郵便箱に投げ込まれたのではないかと思います。発行が、丁度、年明けとなりました。

あけましておめでとうございます。

窓から見下ろす池に、30羽ほどの鴨が飛来しています。「かるがも」かどうか、「鴨」と他の鳥の区別をつけるのが精一杯の私には残念ながらわかりませんが、毎朝、ブラインドを上げて見るのが楽しみになっています。水面をわずかに波立たせて泳ぎ回り、時に頭を水に潜らせ、時に背伸びするように羽を広げ、互いにちょっと近づいては、また、離れ、と思うと、そろって空へと舞い上がる。締め切った窓の外に飛び立ちの羽音を想像し、1日の始まりとしています。

今年もよろしく願いいたします。

(ひ)

発行：つくば市子育て支援ネットワーク **かるがも・ねっと**

「かるがも・ねっと」は、つくば市にある子育て支援に関わる

機関・団体・サークル・ボランティアのネットワークです。

発行日：2008年1月4日

編集：飯田浩之・岩村一代・喜多路江・丹治恭子

連絡先：【E-mail】karugamo_net@yahoo.co.jp

【FAX】029-853-4829(筑波大学共生教育学(教育社会学)研究室)